

九州派を代表する画家の一人、日韓交流現代美術展において。

芸術の創造には、長い道程を要するし、闘いがある。私を40年もの年月を引きづっているものは、この闘いがあるからである。九州派には、ライバルが数人いた。現在、九州派は解散してしまったが、やはりこのライバルたちは健在で闘い続けている。

1980年に市美術館主催のアジア現代美術展での韓国の作品には感動した。色彩や、テクスチャーに対する、繊細で洗練された感受性である。白を基調にしたモノクロームの絵画、あるいは、キャンバス地や画材の性状に即しながら、静かに白一色のマチエールを深めていく表現は、やはり彼ら独自の繊細な感受性に支えられた世界といえよう。われわれはそこに、自然にさらされた思索、時には荒っぽく、野性的でさえある思索をこそ見るべきではないか。私は去年(1987)韓国作家、崔明永(サイメイエイ CHOI Myoung-Young 1941- 韓国)との二人展で韓国を訪れた。画廊で、ソウルの美術評論家は、モノクロームの表現とは「本質的に華麗な色彩を忌避すること、すなわち色彩の持つ「個別的で、人為的な体臭を忌避すること」である」と

11年も前になるが、私の個展「白へ」の評のなかで、深野治氏が「一切の人為的表現の拒絶によって、無限空間へ直入しようとする」と、韓国の美術評論家と同様なことを指摘している。

相互に刺激を与えあう存在として、今年で8回目を迎えた日韓現代美術展は、私にとっては、九州派以来の一つのエポックであり、韓国作家との闘いであり、自分との闘いでもある。彼等は新しい東洋の空間(絵画)創造を目指している。

我が国の現代美術の欧米追従主義を克服する契機としても、韓国作家との交流を一層深めようと思っている。

石橋泰幸